

年月日	同上 (西曆)	記事
<p style="text-align: center;">第五十四表 有珠山噴火</p>	同上 (西曆)	<p>涉リ一分餘ノ降灰堆積セリ日々曇天ニテ山上ヲ望見スル能ハザルモ不取敢右及報告候也。</p> <p>鹿部村戸長河野孝忠報告 本月十九日ヨリ駒ヶ岳南方半腹ニ於テ黒煙ノ著シク噴騰スルヲ認メタルニ同日午前一時頃本村字小川及字本別民等ハ該火山方面ニ音響アリタルヲ聞キシモノ有之旨申出之趣有之右報告ニ及候也。</p> <p>(以上震災豫防調査會報告第六十二號加藤理學士報文ニヨル) 降灰ハ年末迄デ多少繼續セリ。(震災豫防調査會 歐文紀要第二卷)</p>
	<p>寛文三年七月十四日</p> <p>明和五年十二月十六日</p> <p>文政五年閏一月十九日</p>	<p>一六六三^年 八^月 一六^日</p> <p>一七六九 一^二三</p> <p>一八二二 三^一二</p>

嘉永六年三月十五日

一八五三 四二二

明治四十三年七月二十五日

一九一〇 七二五

ハ地震鳴動約四十四回、十八日ニハ約七十五回ヲ算シ、十九日ニハ愈々其數ヲ増シ朝ヨリ正午頃迄ノ間ニ約百回ノ地震ヲ感ゼシガ、同日午後二時頃ニ至リテ遂ニ甚シキ鳴動ト共ニ破裂シタリ、同日及ビ翌二十日ハ黒烟ノ噴出、電光ノ閃射アリ鳴動夥シカリシガ、二十二日午前四時頃ニ至リテハ猛火ノ噴出ト共ニ南屏風山ノ山側ハ一面ニ燃ヘ上リ降灰甚シカリキ、翌二十三日ヨリ二十九日迄デハ時々黒烟ヲ噴出シ猛火ノ燃上ヲ見タルモ噴火ノ勢力ハ次第ニ減衰シタリシニ、二月朔日ニ至リテ最後ノ大變災ヲ現出シ、午前七時頃夥シク燒石土砂ヲ噴孔ヨリ押シ出ダシ、大泥流ヲ奔下セシメテ虻田「トコタン」地方ヲ掃盪セリ、翌二日ヨリハ次第ニ噴火ノ勢力ヲ減ジタリ。(大日本地震史料)

十五日虻田ニテ地震八回ヲ感ジ正午頃噴火トナル、有珠ノ土人ハ稀府邊ニ虻田土人ハ辨邊ヨリ禮文華ヘ退去セシメ(手當トシテ官ヨリ米酒煙草ヲ年々春秋兩度ニ遣ハセリ)。七月頃迄ハ燒ケ續キタルガ山頂ノ形狀ハ噴火ノ爲ニ變化ヲ來タセリ。四月十三日ニハ大有珠岳ヲ生成セリトノ説アリ。(大日本地震史料、河野常吉氏「有珠岳ノ噴火」)

七月二十一日ニハ既ニ有珠山ヨリ數回ノ微震ヲ發シ、二十二日(満月)ニハ西紋籠ニ於テモ二十五回ヲ感ジタリ、翌二十三日ニハ更ニ震數ヲ増シテ百十回ヲ感ジタレバ山麓諸村落ノ住民ハ他ニ避難シ始メタルガ、二十四日ハ愈々震數ヲ増シテ約三百五十回ヲ感ズルニ至リ、遂ニ二十五日(太陰曆十八日)午後十時ニ及ビテ有珠山ノ北側、即チ洞爺湖ノ方面ニシテ

年月日

同上(西曆)

記事

湖畔「トコタン」ノ金毘羅山ヨリ噴煙ヲ始メタリ。其レヨリ八月初旬ニ亘リテ活動最モ盛ニシテ金毘羅山ヨリ東丸山ニ亘レル三基米ノ地帯ニ沿ヒ四十五個ノ噴口ヲ生ゼルノミナラズ、西丸山南麓ノ噴口ヨリハ泥土ヲ噴出シテ巨大ナル泥流ヲ生ジタリ、又噴火ノ開始ト同時ニ西丸山ヨリ九萬坪及東丸山下ニ至ル湖岸一帯ノ地ハ隆起ヲ始メ、就中西丸山ノ南側ヨリ東方ヘノ湖岸ニ於テ長サ約七町ノ間ハ隆起ノ現象著ルシク北屏風山側ナル噴火口列ト湖岸トノ間ニ一山ヲ現出シ九月中旬ニ及ビテハ既ニ湖面上七百尺ノ高サニ達スル「新山」トナレリ。(大森房吉有珠山噴火概報)

附記 明治三十六年(西曆一九〇三年)中ニ於ケル有珠山ノ異狀ハ左ノ如クナリキ

有珠山ハ山頂約九合目ヨリ常ニ白煙ノ噴出絶ユルコトナキニ五月十一日ニ至リ俄然噴出絶ヘシノミナラズ十二日ノ如キハ遠雷ノ如キ音聞ヘ初メタレバ山麓ノ人々等ハ今ニモ大噴火トナラントテ人心恟々タリシ二十三日ニ至リ再ビ平常ノ體ニ復シ噴煙シ初メタリ。(明治三十六年五月十六日小樽新聞)

有珠警察分署長ヨリ道廳ヘノ報告ニヨレバ六月二十七日午後三時ヨリ同十二時迄ニ三回鳴動シ、恰モ遠方ニテ大砲ヲ發射セルガ如ク場所ハ山頂ニ非ズシテ山腹ニ於テ發シタリ、伊達村大字有珠地方ニテハ地震等ハ一回モナク、噴煙斷絶モ無シ。(明治三十六年七月一日小樽新聞)

有珠警察分署長ノ六月三十日付報告ニヨレバ右ハ山頂ヨリ數回岩石ノ轉落シタルモノニシテ現ニ同山

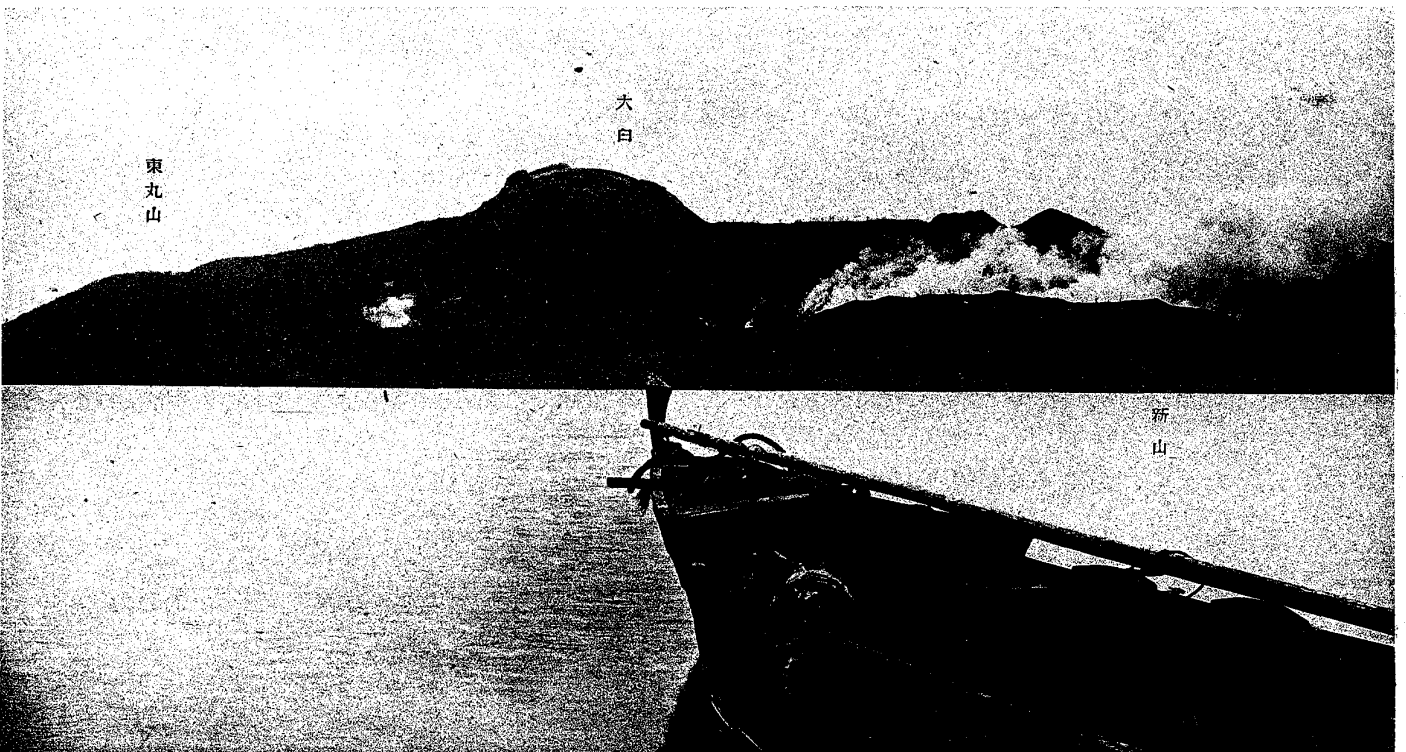
明治四十四年北海道有珠山噴火



明治四十三年十一月十日大森撮影

第 二 十 一 圖 噴 口 群 ヲ 東 方 ヲ 望 ム

中央ニ小富士丘ニ左方ニ高穴丘ニ共ニ灰砂堆積ノ小山ナリ近ノ多噴口アリ

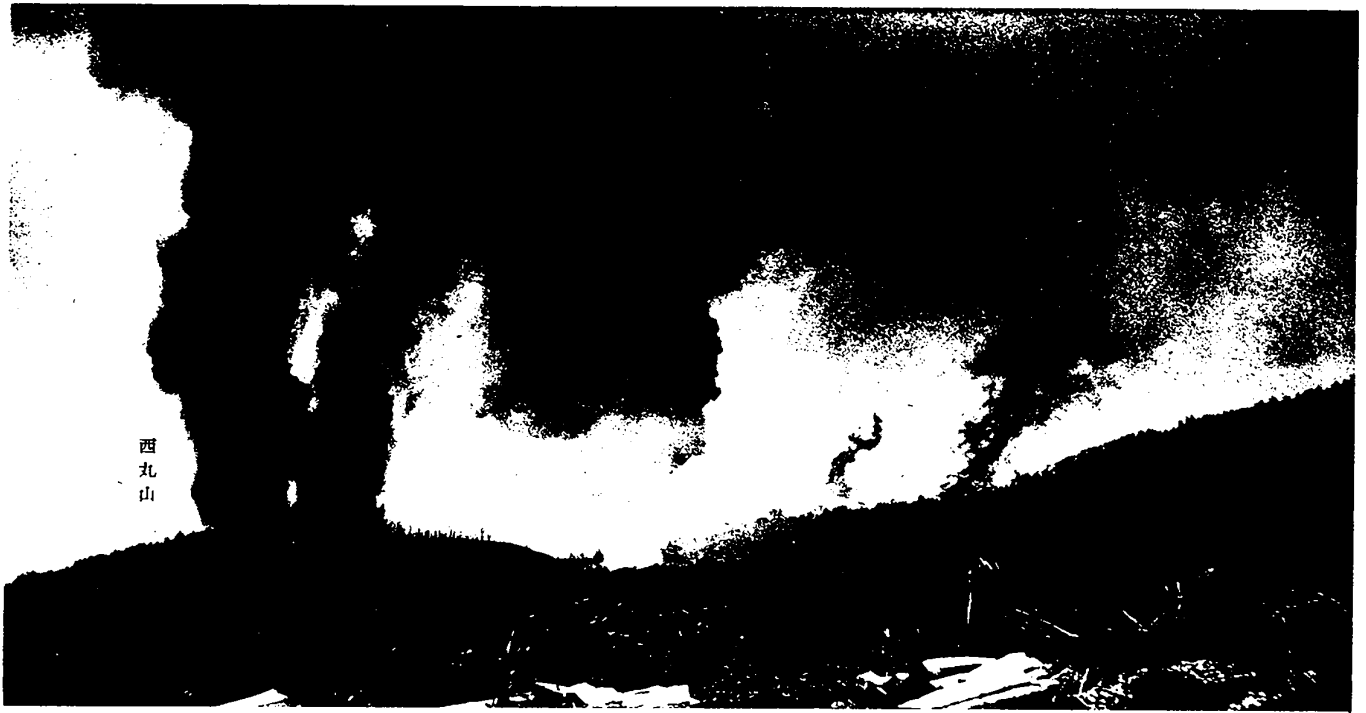


明治四十三年十一月十一日大森撮影

第 二 十 二 圖 有 珠 山 ヲ 洞 爺 湖 中 ノ 饅 頭 山 ヲ 望 ム

中央ノ頂上ノ丘大ニシテ左ノ端ノ小山ハ丸東山ナリ

右ノ手白煙ト湖水トノ間ニアルキ山ハ噴火後ノ新山ニシテ高ノ尺百六ニセリ新山「ル」セ起隆



西丸山

ム望ヘ方東リヨ近附社羅毘金ンタコト畔湖ヲ火噴 圖三十二第
(リナ山丸西ハ丘小キタ平ノ方左) ス煙噴リヨ所ケセニ時同



ルゼ生ニ爲ノ震地日兩五廿四廿月七年三十四治明 圖四十二第
害震ノ街市田蛇

(ノモルセ出涌=年二十四治明) 丘岩鎔新山前樽

右側ノ白煙ハ大正六年四月三十日ニ爆發セル硫氣孔ニシテ頂上
中央ノ割レ目ハ同年五月十二日噴火ノ大裂罅ノ西端ナリ



(影撮森大日七月六年六正大) ム望リヨ點角三西ヲ面西南丘岩鎔 圖五十二第

中央ノ割レ目ハ大正六年五月十二日噴火ノトキ生ゼル大裂
罅ニシテ兩側ニ灰ヲ積モラセタリ下端ニ井狀ノ深孔アリ



(影撮森大日九月六年六正大) ム望リヨ近附點角三東ヲ面北々東ノ丘岩鎔 圖六十二第

第五十五表 渡島國大島噴火

麓ニ居住スル舊土人谷伊太久禮外二名ノ實見シタル處岩石轉落ノ際數多ノ岩石ニ突當リ其音響漸ク烈シク爲ニ燒土ノ黑煙ノ如ク立上リタルニ過ギズト云ヘリ。(明治三十六年七月三日小樽新聞)

年月日

同上 (西曆)

記事

寛保元年七月十三日

一七四一年八月二十三日

根部田熊石海嘯ノ時大島ノ山噴火シ灰降り松前晝闇キコト夜ノ如シ。(北海道志)

曉噴火シ、松前郡ネプタ村ヨリ爾志郡熊石村ニ至ルノ海岸海嘯ヲ生ジ家屋流失シ溺死千餘人灰降りテ白晝暗夜ノ如シ。(神保博士「北海道地質報文」)

寛保元年辛酉秋七月十三日乙亥、松前大島火、迄二十五日丁丑、天色暗濛、不辨日夜、十八日庚辰夜、海嘯高三十丈、響如雷霆、人畜死者夥矣、是時形如鯨者、長十七丈、六七頭揚陸云。(弘賢覺書追加引ニ鳥根正黨時世錄ニ)

寛保元年辛酉七月十三日奥州松前大島燃ル、同十四日十五日一天暗冥ニシテ晝夜ヲ分タズ、同十八日曉ニ津浪高キコト二十餘丈、人家二十餘軒ヲ漂没シテ人馬死亡スルコト甚多シ。(續日本王代一覽)

松前灰降ル平地三寸餘。(北道道志) 大島噴火ナランカ。
灰降ル灰中赤白毛アリ。(同上) 同上

同 元年十二月

一七四二年一月

同 二年四月

一七四二年五月